



葛のふと秋之部

立秋

松をよももて涼しや夕陽の輝
久月や空を霞とよむ 嘆くは
琴の字は昔しお生ん秋のつ
之日月の入りの暮や扇をく

七夕

星の胡さきしと見えぬ事もか
朔きよをたをりもてりかしの宵
妻かしの事のみまねてや火より出

隆辰首面ふりりる席上ををりぬ
ともやうしよを青さをしむ

影くとも七葉の楓をいささきし
とてしとて星のしはくや信ふ髪

一つふ峰をも銀河のしるやとての事ん
しちかろく小女を幾る

静のあふてきおひくるの星
早ふくまよきあはる黄の歌はしる

八日の那のりあふしとてあな新婦よ
さあれらりしあまきくはしむしる

奥はしよむさく涼しかりの歌

けしきもそのちとほるや糸田用を

いけさうしけを失あひはれ年

ふふつよや 揖よまきのをうく
稲葉やすきはくあるさく花

露

いつとも 露の杖
志くや人や人よく 露の杖
足は志くや人や 杖の杖
夕くけや 草の杖 露の杖

峰の 杖の中もさくや 杖の杖

情の余りく 感をもく 杖の中もさくや
うかきを 取よく 杖の中もさくや
詞のつとむるもく 杖の中もさくや
のつくかき 杖の中もさくや

下 杖の杖 杖の杖 杖の杖

毎 杖上人を杖

杖の杖の 杖の杖の 杖の杖の
杖の杖の 杖の杖の 杖の杖の

七夕も妻あめをやらる木槿は

ふふおめよんを入るの作試をん

大原の葎磨うせむよ

る年丁本縁をむをらね木槿

脊戸の秋豆ははらうのひら苜蓿

らる柳 芦も穂をの付りりり

葎

朝うほも日毎いさう孫は形戸

葎はくすけふや油のももも

胡息はせの月をまてあう戸

系図は夏歩をあら

朝うほも家もをん 杖歩夜

葎 葎よをあら

杖をくすけふや油のももも

ひくくくくお夢乾くすくくく
泣くくくを屋花うくくくくく
日くくく日けくく寺の屋花く

女郎花

さくくくくや冬花のくるをくくく
急けくくくく似つくくや女は巻
去くくくくくくくくくくく

をくくくくくくくくくくく

敷巻の所の浪文はけり持りて
知るるそくくくくく

萩の夕早の余波もあけけ
果くくやき御を能や萩は系
人定免くくくくくくく

もくくくくくくくくくく
依れをくくく

小車やまゝのぢや房の七草す
尾よあらし人かれくまの流

世

かく世の中へ片しこむるの鼻
えくしゆめのみるう午能きこく

五中八空をもてあまのちのち世に
のこ遣入ぬるに世よあまのちのち

一聯 西赴

松中よあまのちのちのちのちのち
うはまのちのちのちのちのちのち
月まもあまのちのちのちのちのち
芒刈るまのちのちのちのちのち
情吟の情をそるや舟の五番
花折つ屋をまのちのちのちのち

まつ月や春情を思ふ人のうらみ
月よきよ送る也夫の伊勢系と
月の雲けはよりぬく夜のなごむ
あそぶ家ハ月のとうふをほれける
ハナハあそぶ命やいゝな月
大系や月よほんむくあーり

澁む坊の画四睡のかくちん侍よ

男も嫁もあそぶんこの月夜
雲の月ぬきととほや話訪りぬ

待宵雨祈禱

空をふかや鮎も習ふかあそびけ
待宵や浦雪の雲のそよせん
中余さの十五夜足るそよ宵を

良夜

夕の月さきもをちぬ 光の如
夕月や小ぬるき如く 白の如
澄月も乾ひし一宵の 駒の星
六のもしやまつらの家の寐ぬ月足
看徑のうらみはきくしやきくしの月
月足もよううらみはきくしやきくしの月

老ていんまきくしやきくし
東壁に渡酒ゆをうら

夕月をいんまきくしやきくしの月

うらみはきくしやきくし
この十時房にその移る人あはれをけめ

うらみはきくしやきくし
夕月をいんまきくしやきくしの月

うらみはきくしやきくし
あまの月の如くしてあまの月の如く

十五夜をすめしやきくしの月

十六夜

ひさしを吐のまき 虫をとり
十六夜や一帯もらしし 松の浦
いさよはやきぬ 古今よあはれん

あつ汐や夢のふたふた 燈架もち
汁うけきうたも 飯やみかふ

蜂の暮 蜂火も 石見神
小 花もよせ 菊の咲 — 形も
うそそや 地産うそそ 越ん 境

糸衣の鈴も なる 夜も
あつ 後よ 暮目 百も 虫も
玉 露の 橋よ 月も 虫も

甲斐歌うさ身す心と夜をさそ
糸書の息あふる 東さうの靴
巻はる傘のさゆつと夜寒さ

砧

唱あさいさ秋さあゆや小夜魂
河月流や情さつとさろあつ

古詩体あまこころさるる心うつらよ

僧見あまや空よあつて哀うつ

乙子のゆきをんを 雲 飛うを

才る 臥せ菊ハ折入 枝もか

かきこころ 菫中う 忌さくは 糸つり

芦の穂より 里鏡み守る 雀うね

粒あり刈倍やそまゝ 水澗傳
大藁のくまき 新や泊の新千
ひやくし地をさるるや空獲の花
唐くし 勢ふくせの そのあは
坊くまよふき 毎まきをぬくと飯
黍の中 嘆花しと 語る来る

おへまひる 乃あうかう 黍のおま
魚の粒より 新くしと のどとら 家

二世安樂と志るを教小寺の
鄙くしあまし

市佛の肩おも 一把 稲 玄 秋
頂流あり さらる扇 あま 枯田つ
早稲の粒や 雀も走るぬ 指く 作
多稲のよりや 咄も 眠るを ささるる

子 鶴子 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
稻 子 け け け け け け け け け け

葉山子

く あ ー り ー 葉 山 子 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 葉 山 子 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

葉

黄蘗のくさくさうけより麻のさ
糸葉少む麻ハ多し人 鳴るる
霧のさき月さくさく澄夜よ
小畑より麻のさくさくさく

雁

夕のや星のほろもあふ日比
夜の中はあひまゝさや厚のさ

去つて厚のハ江戸も雨夜さ
さつ丁やさゆをかき 女入る比
厚のさあやさ水も流るる
さくさくさくさくさくさく
影のさくさくさくさくさく
影のさくさくさくさくさく

晴
五
餅

后月

生
后
本

后の月片舟持

待

十と夜

婿

后の月

日本
京
乃
と

井市をきく位に五郎を

長月の枯や小物も荒るはく

家子川戸の口んえそ 蜂の止

一翁上人のうやはり

すぬくおをゆるて

炭とく水も枯すむ 苔のうへ

蜂の口や柿喰ふとさう 後の居る

さしきさや塘よもまお山のもる

秋日はさま秋あはれとていつは

うまきしぬ人

耳よはく草鞋のきや 蜂の雨

檢校の堀井もるさる 蜂のる

菊

杉をくた山きや 葉の遍き日

同まーや 菊咲くうの浮世さ

莫嗔野店無肴核
博酒堪沽豆莢肥

不ぞ守むや三葉の日はを翌あしそ
来くの魚よさしてせうう虫の視
森 森よ 泣あきとれと 葉の花
菊の香よあ〜〜めて〜や月夜さし
小さく〜暖日あ〜〜あ〜ぬ 推うもと
志〜〜葉よあ〜〜ま〜 十日うか

碩布の山作止て

小ハ多能いく孫彦や来くの花
やさ〜ハ委皆の歌をいれ〜とてす
るく小〜箱の蓋や〜の板を串の
路よは〜〜と〜安よ立を〜山細
あ〜よ〜や〜とめ是あり

焼 帛ハ紗る 葉具も びうめりど

百 香あやめる〜〜き 葉の菊
みちの〜の百非傍一切の葉を
経る〜白川の園おほ〜

て長月九日... 記号ふハ
とくさきん

くちんをて菊さきふきあはとも

紅葉

傳教のめては片見ゆる 紅葉の

まはしや紅葉を染むるの音

きぬ人もあつてはゆき柿の葉

振る 鞭もきくし 腰もや 小坂越

小坂越は甲田の金山をたよせぬの玉へ赴く
一糸の距離をこころはそゆは愛ありとて歎

梅 千と葉くしりや 葉の宿

はらふて 埒垣くすぬ 下と葉

くく 枯や木枯らるる 瀧の町

むしつらき小島ありて今又あり

流あらし 村を小き流の 門の村

川あふの葉も多むや山の栗
さびしきや菌のうさね 宿るまじ

行秋

り 娘や紅葉を手に持て
ゆく枝や晴の羽根搔くいごと
半ばはるる舟もゆくけ 杖暮る
はるもさも ふうまをさる 越の秋

ん じ 年も宵ふ余り九りと
ま ち ら ね る と 長 能 の 勢 も お ぼ え
お き たる 處 あり 石 海 あり あり
よ 人 へ 凡 事 あり け ぬ

唄もねぬ 昨のやみや 九月を

人 へ 酒 の 夢 夜 の 梅 と 中
え へ ぼ け の 十 七 年 忌 吊 ぶ け ち も
孫 の 人 ね ち ね け け ち の 幻 じ
あ け け け け け け け け け

さ び や さ び 秋 酒 は ち ち 白 雉 来

葛のもと冬之部

時西

藁厚の畔もちろる走らんを
あま敷の宮も暮れぬもふり時
走らんを夜と春あひそ嵐の字
本母寺ハ走らんも夜くの方とらん

浚白の委と探をくくく云からけの
阿字をよりぬ

五

五

眩すきそけの路の所々まで
灯もおうつよ〜〜居るまや非無月

霜

衣れぬや生薑も植てある少く
衣のそを結うえ〜〜る糸色小
志もの返り浦山〜〜もか〜〜も糸

越の玉ふり

衣れぬや日雇出〜〜り 紗五十
衣のそを〜〜まで産を〜〜り〜〜める
花を〜〜〜〜〜も糸色小〜〜

い〜〜の杖父の園と有る〜〜〜〜
た〜〜と〜〜と〜〜公私のおお〜〜空
山並地若干多く便〜〜ませカ〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜山
〜〜〜〜人目も草も〜〜〜〜
山並のい〜〜も〜〜

お〜〜や倉もあ〜〜 稼山

昨もあきぬの恒根のさるん霞

形あまふふとて戸をせし小春は

芦のあひのさくをさきし小春は

こくしや雲水てふ草鞋く

寺建る僧のうらやを日あ

をさるふとる富士の人命う



けりも冬月よまもきしし昔の
吳光とてさるるをわめさるや昔らん

みづの月桂の下さるるんゆき也

只すさるるさるるさるるの月

月もさるる十夜さるるの脊中法士

竹菴實趣

志くれん會やさるるを連珠て従明る

像あつるさるるをさるるさるる

サリけりさるるを

ふる中ねのふあふんたても雁翅拾

ふたねの四の〜〜〜〜〜

金人〜〜〜〜〜

翁忌や 翁も死深う〜ひもの

小千谷由都苗亭時雨會百負養頭

今式免くるりもあ〜ぬ翁の日は

是所奉侍りの神雪ハ心〜〜〜

人も合器も〜〜〜納豆汁

よ〜あ〜〜見ゆるあか〜〜構

鴨のた〜春戸田〜里 冬〜戸〜

玉河老人の古土利

〜法〜〜〜白

男めり 蘇 冬 法〜〜〜あ〜〜守

押 並〜〜〜るるす 細代 守

うそ〜日の仕や〜もあ〜ひ〜あ〜守

イハたりのよはを無徳とが久定
めていよ原恒の持をいよつと孫
ち孫と人きこいよをいよつと孫
あつたてく

楳のよよとく燦市うと 昔よ名と

楳よ孫一旅人 狸みきう あつた

冬を伝まよよよきのうよよい集ころ

画 厚よあつと大桶ハ ちつと

村重の才情を伝まよつ時

巨體うう孫をけいへんもつた

あ中〜 燦野をちあも 抱上り

川をくら載る相書家とて孫家の言れり
よ江戸橋のもの書あつた地も走れり

今も千の軒もまや〜 傳一や

日頃〜の社と

片とまやあ夜つ 垢を ぬす

あ夜らん刀自の社 徒 甚うぞ

麻露膏は年の末を

治すに

要るにツ先くを身しと 是を

うちのあまのいふもせらも 嘔年

ふやーとては

くく志忌し 象を志るる 鴨の

身衣をん 富る式部を 書し

藩末をて 藤や小とて 持以堂

炭竈く 中へくけし 月日は

をま火着 菊くふくれを 炭の 敬

日の清く 粒沙法も 色くく 石居の花

小文庫 有城海等の 烟を 中んと

云如 賀の 其谷

く 暮く 本馬 すするや 批 批の花

黒田川よ 妻し ありて 志るを 昔余り

藤丘あり 浦人く 亭よ 依 批を いとむ

茶山花を折て見たり 風り伴
 茶はくをとりて見たり 古茶木
 うつらうつら人なれ 枯屋花
 水多きを足して人なれ 水屋花
 枯首やゆきや 呼ましら
 茶うや 佛の世も一しけ

さうらの茶を折て見たり 茶よああ
 華あをて 破よをて ころとて

茶まゝ 修えしれ茶もろく ちれろく
 枯あしや 茶のちりて 枯の枯
 茶もろく 茶もろく 人目もろく 茶もろく
 ころちり 茶のあまろく 茶もろく 枯ろく ける
 大と茶のまよあつ 枯ろく 茶もろく 茶もろく 茶もろく
 両肩 茶もろく 茶もろく 茶もろく 茶もろく
 鼻も 拍ろく 茶もろく 茶もろく 茶もろく

とハとてあまも枯らりうれかハ

天童の噴霧さるゆうれ世と

岩津のつらー一信法川最上の一の

急流さるや

山石津や水と流るる花本の紫

本葉とれとけらり記も山石免く

流るる水もあそと銀告の尾葉と

最上も尾葉とさる何うれと

うさほくや徳柄までもむと尾葉

流るる雪を人声音等とさるや

上もあんと自らあるさ

ま川等の玉粒あるさ一書を成

あされやさる豫念の麦とさけ

最上麦刈はるうりれを滝のさへ

科刈一流のそ見ある山のそ

大のふもてりさ新く怒や草かいら
折かとの甚引ほくすて畑
葱ふし波しのみをよか新かよ
鶴の徑長しとかくる冬田つ
ふく文ぬ田中の完のくゆるを

冬鳥

水鳥も 瀬川 さまはふくくく や

水鳥能入まこくくく 津久井縣
鴨ふくや 雪くくもら也 南 志け
冬鳥のあくくくくく や 冬鳥のわく
冬鳥鴨よ 雪は秋の時代乃冬鳥さん
小鴨よも余はくくくく や 都 鳥
水鳥の雁よよ 冬く新くくくく

冬鳥

ふきよハ崎の本葉はありつゝ
鶴も二三度とくたふきよ
舟の馬ふきよ沖洲志きえり
光輝りふきよ又ふきよ月夜
根も去つて里りちとくた
ふきよ崎や藤ふけ一人きよ

きよ更きよふきよ
藤割一藤ふきよ
ふきよのきよ

こきよめきよきよ

河原のつゝ崎

ふきよのふきよ
ふきよのふきよ

ふきよのふきよ

〜 鮎を〜 仕舞乃

〜 夜の〜 命を〜 至す

孫景も 高麗〜 人 命を〜 守

子 命を〜 守れん 料の 命を〜 惜

孫 眞殿を〜 守り 命を〜 守り 命を〜 惜

命を〜 守り 命を〜 守り 命を〜 惜

命を〜 守り 命を〜 守り 命を〜 惜

命を〜 守り 命を〜 守り 命を〜 惜

雪

〜 雪や 入院の 命を〜 惜

初雪や 命を〜 守り 命を〜 惜

雪圍の 命を〜 守り 命を〜 惜

命を〜 守り 命を〜 守り 命を〜 惜

くまの雪刀根もくまの物も掃る
雪の日やゆしき家のなまきし
雪はや鶴の目つまは吹きひき
形ふくや雪ふあきさるあきさる
雪ふあき風さ地はくさくさ

一葉の清貧を尊とむ

塵とくは梅の古葉をさる雪の雪

木

雪の日や鹿のまき通る瀧の町
豆うまつくや鳥も由森のさる
雪圍をまきまき大さるのほ架うか
若雪よとらそは智のそ物おもゆる

雪片りけさるは修練の涙よ

京町のまきまきかきし袖の雪
在寺や天井し流るぬ雪あり

雪

伊勢の定もあまの白雲あるのはる雪

山里や雪を人まれば霰降る

あゝれも雪のまじりや子にありき

馬酔木思を志とるは枯れをこそ思ふ
井ハカシとふんゆる

みそまや雪よあはるる小笠原

山田の峠の枯すは刈人前ふと
よめまやまうの家ん

在

刈人もあまの依りてまのりる

まの雨もあまのまじりてあま

禪の心もあまのまじりてあま

くさくさ家鴨のまじりてあま

あまのまじりてあまのまじりてあま

折つてもあまのまじりてあま

死なれども和尚と雖も其椿
無きを仏子の者ありてをまはし

老情

死なれども人恵もしるをを苦き

花より候ふやれう念ハとくくや

昔も亦とも事なき餅のさハさ

花より候ふやれう念ハとくくや

燈籠ハいつもさふくく用なき

何くもさくく家の年一角を

世に生まれて中へてを一年の市

くハ世の千葉刺むわくハのそとす
えり都よりあま〜ハまくるまも水
のそともさくぬ徳代もの匹道き〜
まもあつて夢つく曰のうけは座血くらんを
おろしは智徳の座ま〜うひ〜二月つるを
三世のらあ〜おもくれ〜のあ〜

くれくろ鬼追あ〜〜尾忘す

とろを捨てる所の御能事よ〜
とろを〜ノ且坊よ事

鬼よ〜も古〜もヤ〜ノ音の豆

〜中〜の心も〜ぬそ〜ま〜夜

き〜云もの〜は〜れと唱へ給
き〜は〜もおも〜

小窓〜く〜て〜も〜ゆ〜や〜年〜れ〜も

色〜〜ぬ〜礎〜れ〜〜年〜〜ん

袴〜ゆ〜も〜あ〜〜れ〜〜年〜

おの葉も帯よあ〜〜年〜れ〜塵

梅土筆〜〜〜富〜〜年

〜の夜や〜い〜合〜の〜か〜

之國嶺之社神現法楽

赤城をさうくして先とりの居り
ふしを明一奉る

月雪う癒るはくまを見えし中

深きくじらひまうそいよく静りの
実よらんるま

静の菓もくはまもまらんうか

飯坊の侍はけけりの後く
まらんと思あててさき

あゆも志あぬり非よらんませ

小千谷うへ長谷へ送るおれ在中静れ
中よまきうあははの菓也坊をえあふの
及んかん

井の所へ病もあまよ 掛の者

六人をも白人も嬌一 雪の告

この道打うらまはくを井の
まうららうらんよまらうもとおは
かちの侍も白人もはくれ八行を
とやうららうらうらうらうら
静くもそそ入間をねる市村羽屋つ
あはれあはれし時のはう
墓のあはれをえん

あつしよしとても時自の巾とて

初畿の山寺より往てとてくくしとて出進
の及てとてくくしとてくくしとてくくしとて
はくくしとてくくしとてくくしとてくくしとて
まのくくしとてくくしとてくくしとてくくしとて
前世よりくくしとてくくしとてくくしとてくくしとて
くくしとてくくしとてくくしとてくくしとてくくしとて
その後下る所のくくしとてくくしとてくくしとて
て汗とてくくしとてくくしとてくくしとて

あつしよしとても時自の巾とて

草莽もくくしとてくくしとてくくしとてくくしとて

くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて

くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて

くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて

山嶺くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて

人世莫為婦人身
百年苦樂因他人

くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて
くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて
くくしとてくくしとてくくしとてくくしとて

こけりく散るるのまを梅より
小娘のを海もふいす免んそ二つ物
あまうあまうあまうあまうあまう

墨志く勢破りあま川玉

まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふふ

あまうあまうあまうあまうあまう

角田河四時

あまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまう

あまうあまうあまうあまうあまう



